

第 11 回(令和 4 年度) 名古屋大学水田賞

藤田 菜々子 『スウェーデン経済学史とスウェーデン・モデルの研究』 講評

受賞者の研究は、北欧の福祉国家スウェーデンを代表する経済学者ミュルダールの全貌の究明から始まった。続いて次々と対象を広げ、12 年後にはスウェーデン学派の全体像を描く大著に結実した。これは欧米にもない唯一無二の傑出した成果にほかならない。

受賞者は、ミュルダールの方法を「累積的因果関係の理論」の方法として把握し、ミュルダールが経済学者・経済政策学者としてその方法を洗練しつつ、一貫して多くの多彩な仕事を行なったという独創的な統一的解釈を打ち出した。さらに、この視点によって、3 世紀に亙るスウェーデン経済学の歴史をイギリス、ドイツ、オーストリア等のそれと比較しながら、国際交流も辿りつつ、草創期から、ヴィクセルやハクシャーなどの第一世代、ミュルダールやオリーンなどの第二世代「ストックホルム学派」の絶頂期、ケンブリッジ学派とケインズ理論との関係、国連への寄与、その後の学派の衰退という具合に、スウェーデン学派の通史を描き切った。この広大な全貌把握は容易ならざる偉業にほかならない。

北欧の小国としていかにして経済発展を実現するかという課題に直面していたスウェーデンの経済学者たちは、マルクス主義に重きを置かず、自由主義か社会民主主義かで論争し、後者が優位する論争史を展開したことを、受賞者は幾多の経済学者と学派、世代の航跡をたどりながら描いた。さらに受賞者はその経済学史をスウェーデン社会の発展との関連でも論じている。自由競争から福祉国家、さらには福祉社会の形成へと、社会への寄与は展開していくが、この文脈に注目したことによって、研究は社会思想史としての経済学史と呼ぶに相応しいものになった。

受賞者が明らかにした小国のスウェーデン・モデルが、国情の違う国々にいかに援用可能か、失われた 30 年と言われる経済低迷が続く日本経済の診断に、それがいかに適用できるか等については、さらなる考察の余地があると思われる。受賞者はすでに多大の成果をもたらしたが、弛まぬ研鑽によって将来さらに大きな貢献がなされることが期待される。